【ポスター発表】

在宅療養高齢者に対する居宅介護支援・訪問介護・訪問看護のトランディシプリナリーアプローチ実践に関する研究(2)

－仕事の環境との関連－

○　梅花女子大学　綾部貴子（3308）

松井　妙子（香川大学・3306）、原田　由美子（京都女子大学非常勤講師・6076）

キーワード：トランディシプリナリーアプローチ・仕事の環境・在宅療養高齢者

１．研 究 目 的

本研究の目的は、訪問看護事業所の訪問看護職(訪看)、訪問介護事業所のサービス提供責任者(サ責) 居宅介護支援事業所の介護支援専門員(CM) の三職種によるトランスディシプリナリーアプローチ実践と仕事の環境との関連を明らかにすることである。

２．研究の視点および方法

調査の対象は、CM、サ責、訪看である。対象者の抽出方法は、47 都道府県から無作為抽出した 24 都道府県で WAMNET に登録されている居宅介護支援事業所、訪問介護事業所、訪問看護事業所各事業所 800 か所の計 2400 か所を無作為抽出し、各事業所の調査対象者 1 名に回答を依頼する郵送調査を実施、自記式調査とした。調査期間は、平成 27 年 3 月 20 日～4 月 20 日であった。分析対象数を 602 名(有効回収率 25.1%)とした。調査項目は、独立変数として、コントロール変数の「性別」、「年齢」、「在宅療養高齢者を中心とした居宅介護支援、訪問介護、訪問看護の三職種によるチーム活動経験の有無」、「チームアプローチやチームワーク、連携などに関わる職場外研修受講の有無」、「仕事の環境」3 因子（第 1 因子「利用者本人や家族との肯定的関係」、第 2 因子「連携時間の確保」、第 3 因子「報酬への満足」(前演題(1)で報告済み。）を設定した。従属変数は、訪看、サ責、CM の三職種によるトランスディシプリナリーアプローチ実践（以下、TA）を設定した。本研究における「TA」とは、「サ責、訪看、CM 各メンバーがそれぞれの役割の拡大、役割の強化、役割の発展、役割の解放、役割のサポートなどの活動を行い、対象者のアウトカムを推進するチームによるアプローチ」と定義した。「TA」4 因子(既に検証し他の学会で報告済み)を設定した。第 1 因子＜具体的な方法を活用したアプローチ＞は、「状況の変化に合わせて迅速に情報の共有、タイムリーに報告」「家族関係や介護のかかわり方の変化をメンバーへ情報提供」「本人や家族の意向の変化を共通認識しケアの変更に関する合意形成」、「対等な関係の形成」「状況に合わせて柔軟に対応」「ノートや電話、会議等最適な連絡手段の活用」「情報共有の必要性を高齢者家族の理解を得る」「高齢者の生活状況の変化を予測しチームの課題とし対応を検討」「高齢者の意思を多角的に把握しメンバーで確認」「家族間の思いのずれをチームで共有」「自分のできることを伝える」「変化を伝えることにより新たなサービス導入の契機をチーム全体でつくる」「メンバーの不安を傾聴し助言、専門的判断をチームで了解し新たなサービスの導入をチームで検討」「メンバーにわかり

やすい言葉と適切な文章表現で情報提供」「それぞれの立場から意見を聞いてまとめていく」「必要に応じた同行訪問」「高齢者利益を優先にメンバーからケア情報を収集」「緊急時に役割を代替し関係機関との連携調整」「他のメンバーの情報を活用し良好な関係を引き出す」「ノートによる情報共有のあり方を工夫」の 22 項目、第 2 因子＜チーム内での役割解放のためのアプローチ＞は、「職務以外のケアを依頼するときは抵抗を軽減」「職務以外のケアを依頼されたとき助言の下で実施」「利用者ニーズを中心とした分担」「利用者が受容する過程に合わせてメンバーの役割を変化」「他のメンバーの経験や技術レベルの違いを認識」の 5 項目、第 3 因子＜チームの発展や拡大につながるアプローチ＞は、「メンバーからの助言を全体で受け止め課題解決」「日常生活を安定や継続のためチームでの柔軟な対応」「チームという発想をもちメンバーの役割を尊重」「他職種から知識技術を学び自身のケアに活かす」「高齢者の権利擁護にむけてチームで協働」「各専門職の役割と限界を認識し相互の役割を補完」「連携による結果を報告」の 7 項目、第 4 因子＜チームの強化につながるアプローチ＞は、「メンバーの経験を配慮し役割を柔軟に捉え協力」「情報共有の時間の必要性の認識」「高齢者家族とメンバーで形成された信頼関係を活用」「メンバーの支援の成果を確認し達成感を共有」「メンバーで疾患の知識を共有」の 5 項目でそれぞれ構成されている。分析方法は、重回帰分析を実施した。

３．倫理的配慮

倫理的配慮として、香川大学医学部倫理委員会にて承認を得て実施した。対象者に、研究の趣旨や匿名性の確保、データの管理方法を文書で説明した。

４．研究結果

分析の結果、各因子に対し、「在宅高齢者を中心とした居宅介護支援、訪問介護、訪問看護の三職種によるチーム活動経験の有無」、「チームアプローチやチームワーク、連携などに関わる職場外研修受講の有無」、「利用者本人や家族との肯定的関係」、「連携時間の確保」と有意な関連がみられた。重回帰モデルについて、各因子の重回帰決定係数は第 1 因子が 0.30、第 2 因子が 0.15、第 3 因子 0.25、第 4 因子が 0.22 であった。モデルの有効性を示す F 値も 0.01％水準で有意であった。独立変数の VIF 値は 1.04～1.33 と独立変数間に多重共線性が疑われるとされる 2 よりも低い値であった。

５．考 察

三職種でのチーム活動経験の積み重ねや連携に関する研修の受講による経験の蓄積と知識の習得を通して、その後の TA 実践に影響を与えており有意な関連を示したと考える。相互の連携を重要な業務であると承認している職場や利用者だけでなく家族との肯定的な関係状態は、各職種による役割遂行のアプローチがしやすくなり、利用者や家族に対してチーム単位での介入が行いやすくなることから有意差がみられたと考える。すなわち、CM、サ責、訪看による TA 実践を促進するには、チーム活動経験や研修の受講だけでなく、仕事の環境として連携時間の確保や利用者や家族との良好な関係の必要性が示された。